



始



37

496

松村介石解

十牛圖解

齋藤松洲畫

37-496



松村介石解

十牛圖解

齊藤松洲畫

大正
5. 5. 20
内交

序

此の十牛圖解は、嘗て我が「道」雜誌に出したるもの、而して一昨年歐米漫遊の節、更に之を別書に編し、和田垣博士に請うて、英語をも入れ、之を携へ行て、歐米人に向ひ、諸宗教の歸一を説き、我が道會の主張をも明にするつもりであつた。然るに大戰突發して、思ふ如くには行かなかつたが、其れでも随分小團體や有名なる牧師や、大學教授などに、釋いて聞かせたところ、市伽古のゴンソラスを除く外、大抵皆首肯して呉れた。ソコで倫敦を出發する時、此の十牛の圖を、友人の加藤君に依託して、機もあらば、之れに由て、東洋の道徳と宗教とを、西洋人に紹介してやれと云つて歸つて來た。トコロが此頃倫敦より加藤君の手紙が來て、之を見ると、彼の十牛の圖の説法を數ヶ處の集會にて試みたところ、非常なる喝采にて大受であつた、因て此の如く英文で綴つて見たとて、其草稿を印刷して送つて來た。ソコで予も大に満足したることであつた。

要するところ、予は此の十牛の圖を以て、基督教を説明し、佛教も歸するところは、基督教と異なることは無いぞ、而して神道も、佛教も、亦た同じ月を指したるものであるから、我等は指を拜ますして、其月を拜すべきぞと喝破し、此れが今後の活ける宗教ぞ、我道會の主張の骨髓であるぞと説きたかつたのである。

吁、今や世界の交通開け來て、楯の全面顯はれ出でたり。何日まで一方に割居して、祖宗の指を拜み居るぞ、高處に登つて、斯の天に冲する月を拜せよ。乃ち此の尋牛より入塵までの道程に就て、能く學び、能く悟り、能く味ひ、而して終生之を我物として樂むべし。是れ予が此著あるゆゑなり。然而して若夫れ此の十牛の圖に至りては、松洲畫伯獨特の筆に成るもの、本書の光榮とするところ也。

大正五年五月三日

著者識

目次

尋牛の圖に題す……………一
 見跡の圖に題す……………七
 見牛の圖に題す……………二三
 得牛の圖に題す……………一八
 牧牛の圖に題す……………二三
 騎牛歸家の圖に題す……………二七
 忘牛存人の圖に題す……………三一
 人牛俱忘の圖に題す……………三五

返本還源の圖に題す……………三九

入塵垂手の圖に題す……………四三

十牛一括……………四九

十牛圖解



尋牛の圖に題す

齋藤松洲畫
松村介石解

十牛の圖は、禪家に取て八釜敷もの、今や之に附するに吾人獨得の解を以てす。本職は謂はん、是れ禪を識らざるもの、廓庵の意は、什麼邊に存するものにあらずと。然り固より禪を識りて始めて之を解くとは謂はず、單之を倩ひ來りて以て吾人の用具たらしめんのみ。何をか十牛の圖と謂ふ。一に曰く、尋牛、二

Search for the Bull.

Firm is the boy's resolve,
He climbs the hill in search of the Bull,
But all in vain!
The cries of cicadas fill the air.



尋ね行く深山の牛は見えずして
たいうつせみの聲のみぞする

茫茫撥艸去追尋 水濶山遙路更深
力盡神疲無處覓 但聞楓樹晚蟬吟

に曰く見跡、三に曰く見牛、四に曰く得牛、五に曰く牧牛、六に曰く騎牛歸家、七に曰く忘牛、八に曰く人牛俱忘、九に曰く還源、十に曰く入塵、卽是なり。請ふ尋牛の圖より之を説かん。牛とは何んぞ、牛とは道なり。茫茫たる世上、多くは皆失道の人なり。卽ち失道の人なるが故に、心亂れ家破れ、煩又煩、悶又悶、薪を負ふて火に投じ、石を抱て水に入り、死して猶ほ覺めざるもの、比々皆以て然らんとす。於此乎、神人あり、聖人あり、和尚あり、教師あり、滅亡の淵に沈淪し、三界の迷塗に轉輾するを見るに忍びず、豆莢を與へて故山を思はしめ、偏圓を出して還源を勧め、こゝに救拯濟度の道を示せば、瞶々朦々たる衆生の中にも、耳を聳て之を聴き、眼を睜て之を視、左らば

我等救はるべき爲めに何を爲すべきや」と尋ぬるもの亦た無き
 にしもあらざるなり。ここに於てか、廓庵和尚、乃ち十牛の圖
 を作りて之を導く、其意や深く、其想や妙なり。
 嗟呼世上の人よ、滿目の衆生よ。迷ふものは鬼となり、悟るも
 のは佛となる。日に背くものは暗く、日に向ふものは明るし。
 一機一轉一瞬に在り。然り然れども是れ賢者の能くするところ
 にして、凡俗の企て及ぶところにあらず。左れば先づ法門の初
 一步より進み入り、ここに道其道の何物たるかを尋ぬべきなり。
 諸君或は謂はん、請ふ其道を我れに示せと。而かも道は人より
 示さるべきものにあらず、自ら行て見るべきのみ。晝火を見る
 も熱からず、凍水を聞くも寒からず。身親しく之れに觸れて、

自ら之を知るべきのみ。
 諸君更に問はん、然則如何にして親しく之を見るべきかと。曰
 く牛は深山に在り、尋ね往て之れに遇ひ、繩を以て之を繋ぎ、鞭
 を以て之を驅り、而して之を家に致すべきのみ。求めずんば與
 へられず、尋ねずんば遇ふべからず。左らば往け、往て之を尋
 ね、之を見、之を得、之を牧し、之れに騎し、而して遂に之を
 忘れ、天人合一の奥義に達すべきなり。吾人の述ぶるところは
 虚にあらず、空にあらず。凡そ此の十牛の圖は、先人の親しく
 實驗して而して之を吾人に遺し、吾人の親しく實驗して而して
 之を諸君に傳るもの、即ち「靈的經驗」に屬するもの、決して疑
 心あるべからず。勿論人に因て其機を異にす。或は一日にして

之を發見し得るものあり。或は一年にして猶ほ發見し能はざるものあり。超宗越格の人あり、滯句迷言の徒あり。或は頓漸其途を同ふせざるも、若夫れ往き適て止まらずんば、必ずや此十牛の圖の人たるに至らん。然ば

茫茫撥艸去追尋。水濶山遙路更深。力盡神疲無處覓。但聞楓樹晚蟬吟。

尋ね行く深山の牛は見えずして、たゞ空蟬の聲のみぞするなどの煩境苦涯を辿ることあるとも、只其れ勇を鼓して進むべきのみ。決して退轉あるべからず。若夫れ尋ね尋ねて已まらずんば、蹤跡忽ち脚下に現はれ、轉凡爲聖の道始めてこゝぞと自覺するに至らん。

見跡の圖に題す

人あり三界に沈淪し、死陰に彷徨し、幻を追ひ、風を捉へて獲るところなく、心火燃え、意馬狂ひて、煩悶愈々太甚し。於此乎救拯の道を四方に求め、或は鎌倉に赴て別傳を尋ね、或は叡山に登りて祕密を探り、或は題目或は唱名、或はアーメンと、山又山、溪又溪を辿り廻るも、牛は竟に見る能はず、但だ晚蟬の吟を聞くのみ。是れ誠意、道を求むるものゝ状態にして、慘又憺、悽又愴、實に同情に堪へざるものあり。其然り、然れども何事も努力なしには得る能はず。かの「一旦豁然として貫通する」とある如きも、畢竟するところ、多年道

Discovery of Foot-prints.

He redoubles his courage,
He'll not falter, nor retreat ;
At last he finds on the ground
Foot-prints of the Bull.



水邊林下跡偏多 芳艸離披見也麼
縦是深山更深處 遼天鼻孔怎藏他

心ざしふかきみやまのかひありて

しほりのあとを見るぞうれしき

を求めし結果のみ。一機一轉一瞬に在りと稱するも、
に到るまでの道程には、幾多の山河を重ねざるべからず。
こゝの題歌に注意せよ。然ば
志ふかき深山のかひありて
とあるにあらざや。

ルートルがスタウピットに會ふて、始めて尋ねべきものを知り、
更にバイブルを發見して、こゝに見跡の眼を開きたる如き、
白隠が尋牛の塗に憊れて、殆んど失意落膽し、漸く白幽道人に會
ふて、始めて正邪の異同を知り、こゝに入道の門を見出したる
如き、皆此の適例に外ならず。
更に又た「しをりの跡を見るぞ嬉しき」との消息を云はんか、

ムーデーは 新天新地眼前に現出して、我は忽ち樂園の人となれりと謂ひ、エドワルドは我れはあまりの嬉しさに心亂れ、氣狂ひ、胸裂け、五體散じて、我れは殆んど絶え入らんとせりと謂へり。此外予は佛者の間にも、神道者の間にも、若くは回教徒の間にも、此種の靈的經驗あることを記憶するなり。然り予も亦た自ら此の經驗なきにあらず。其の尋牛の結果として、始めて大道の足跡を見出し得るや、歡天喜地、所謂る手の舞ひ足の踏むを覺えざりしぞかし。未だ牛體を見るに至らずとも、已に其所在を認む、勇氣やこゝに倍加せざるを得ず。放鳩綠葉を銜んで歸り、彫木海に浮んで來る。復た漂流の人にあらず。其の歡喜察すべきにあらずや。

左らば諸君よ、往け、往て其所信を曲ぐべからず。ノアとなり、コロンプスとなり、ルーテルとなり、白隠となるも、其揆や一なり。半日道を求めて得る能はず、一日牛を尋ねて會ふ能はず、忽ち懷疑に陥り、轉じて詭辯家となり、而して遂に終生を醉夢の裡に送るもの比々皆以て然らんとす。諸君はよろしく其撰を異にせざるべからず。器は一金にして、萬物は自己たるも、之を悟得する容易にあらず。經に依り義を解するも、未だ其人たりと謂ふべからず。左らば忍耐又忍耐、奮勵又奮勵、不轉不退の大勇猛心を振起して、健脚を學行適權の上に運ぶべきなり。人往々にして其塗を議す、而かも吾人は其塗を議せず。牛は深山の中央に在り。東西よりするも可、南北よりするも亦た可なり。

要は早く其中心に突き入るに在るのみ。左らば教義に泥する勿れ、宗門に拘する勿れ。否、泥する勿れとの言にも泥するなく、拘する勿れとの語にも拘するなく、只だ能く其目的と其手段とを識別し、以て得牛入塵の人たるに在るのみ。夫れ聖賢は百代の師にして、天命は吾人個々の間に炳乎たり。若夫れ此二者に憑りて活眼を開かば、牛は遠きにあらず、邇きに在り。而して直に其足跡を發見して以て、九轉六化の道に入るべし。亦た説しからずや。

見牛の圖に題す

尋牛の志を起し、見跡の喜悅に入り、茲にいよく其正體を見たり。未だ之を得るに至らざるも、我目己に其形を見たり、我耳己に其聲を聞けり、人言に従ふにあらず、聖賢に頼るにあらず、我身自ら其形を見たるなり。我身自ら其聲を聞きたるなり。人若しこゝに至らんか、所謂る冷暖自知の境涯に入るものなり、宗教的神祕を味ひたるものなり、即ち靈的經驗の人たるなり。ルートルと其門を同ふし、白隠と其揆を一にす、其の得意や想ふべきなり。

其然り然れども凡そ生命の道には、進歩發展あらざるべからず。

Sight of the Bull.
 Encouraged by this,
 Onward he pursues his way,
 And by the side of a hill,
 He catches sight of the Bull.



ほえけるをしるべにしつゝ、あら牛の
 かげ見る程にたづねきにけり

黄鶯枝上一聲聲 日暖風和岸柳青
 只此更無回避處 森森頭角畫難成

一四
 之を十牛の中に數ふるも、漸く第三の階段に屬す、而して前途には尙ほ七階段の高處ありと知らざるべからず。然り、靈的經驗の宗教者も、神祕的豫言者も、未だ必ずしも誇るべからず。諸君は目以て漸く之を見、耳以て漸く之を聞きたるのみ、未だ之を繋ぎ、之を牽き、之に騎り、之を忘るゝまでには至らざるなり。世には自ら味はざる趣味を述べ、自ら感ぜざる感想を説き、人言を借り、聖賢の書を取次で、得々其道を講ずる講談師的説教者あり。諸君を以て之に比す、固より同日の論にあらず。然れども諸君には未だ努力の足らざるものあり、未だ思想の練れざるものあり。未だ意志の薄弱なるものあり。其の自己の耳目に觸れ來るものを眺めて喜ぶところには、尊きものあり美しきものあり、

一六
更に愛すべきものありと雖も、未だ得牛の人にあらざることを
記憶せざるべからず。若夫れ得牛の人たらんか、復た思想を弄
するのみの人たる能はず、復た美觀を説くのみの人たる能はず。
牛は忽ち荒れ始めて、虎奮龍驤の威を振ひ、また之を制すべく
もあらず。放ん乎、更に之を尋ねざるべからず、放たざらん乎、
我は終に氣死せざるべからず。「ア、我れ困る人なる哉」とは、今
ぞ始めて之を知る。神は美のみの神にあらず、又た力の神なり、
神は理性のみの神にあらず、又た意志の神なり。オ、神よ、冀
くは此奮闘苦戦の間に我を救へよと叫ばざるを得ざる異様の靈
的經驗に遭遇することを得ん。然らば吾人は謹んで見牛の人を
祝すると同時に、更に得牛の人たらんことを勸告せざるべから

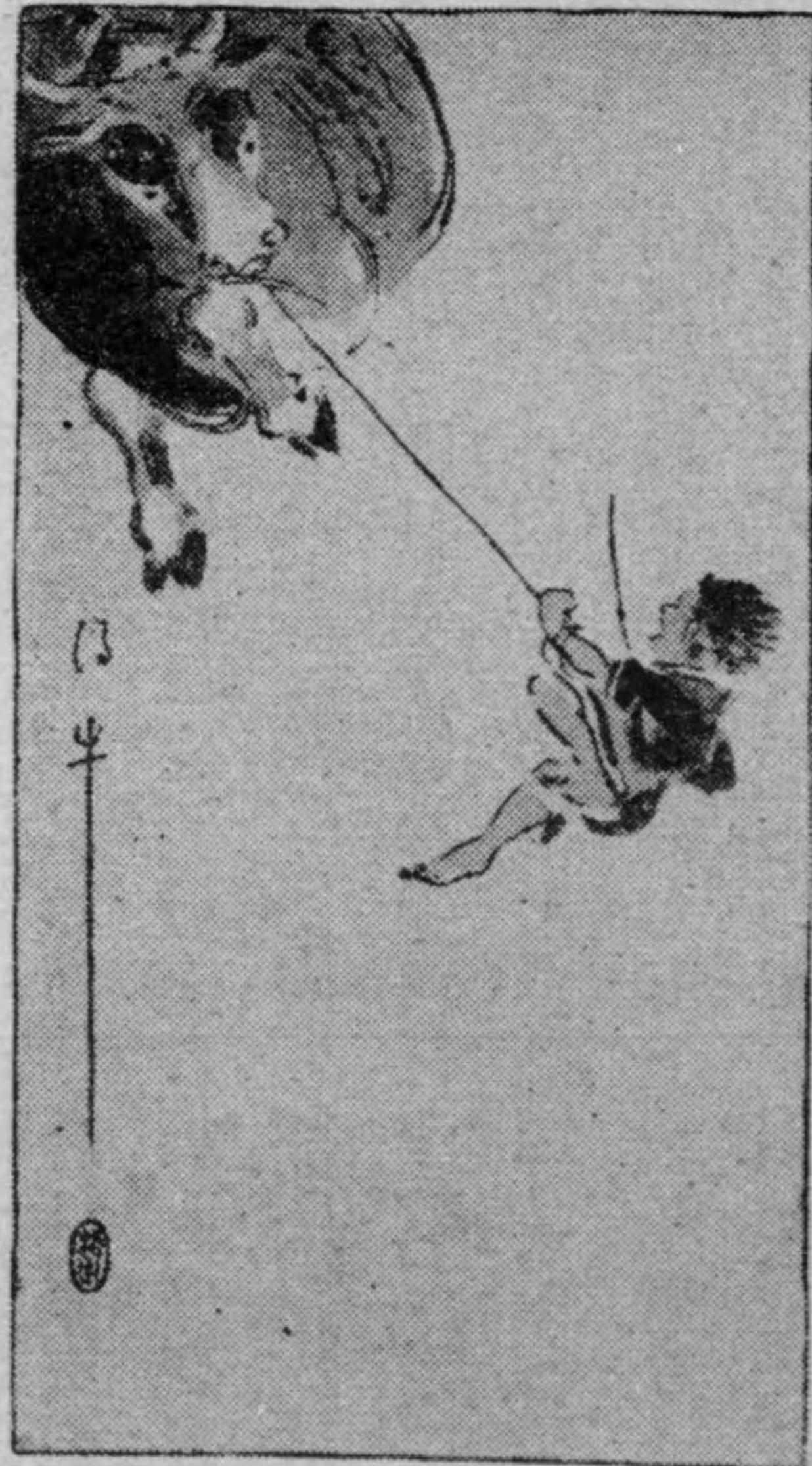
一七
ず。夫れ道は單又復、重又層、理氣相寄り、體用相應じ、一を
以て律すべからず。雪も知り、水も知り、電も知り、燈も知りて、
而して後始めて大妙の易を語るべきなり。天下の宗教者多くは
皆一圖に局す、吾人をして之れが統帥者たらしめよ。

得牛の圖に題す

智識のみの宗教にあらず、思想のみの宗教にあらず、神祕的若しくは美的のみの宗教にあらず、今や之を見るのみならず、いよいよ之を得るものとなりぬ。音に之を知るのみならず、又た思ふのみならず、又た感ずるのみならず、更に之を實行すべき時とはなりぬ。然則其消息や果して如何。一書を讀んで感奮し、一説教を聽て心酔し、吁、我が求めつゝありし道こゝに在り、吁、我が尋ねつゝありし先覺こゝに在り、我れは今にして大に悟れり、我れは今にして良師を得たりと、欣躍の情禁ずる能はず、乃ち爾來其人の書とあれば之を讀み、其

Seizing the Bull.

The Bull he seizes,
Tries to lead him on,
But how ferocious the brute!
And he how powerless!



竭盡精神獲得渠 心強力壯卒難除
有時纔到高原上 又入煙雲深處居

はなさじと思へばいとこゝろうし

是ぞまことのきづななりけり

人の説教とあれば之を聴き、己に業に道に入り、己に業に其人格を一變したりと確信す、而して其確信の至誠にして眞面目なる事は、實以て畏るべきものあるなり。其れ然り然れども鍛錬を経ざる信仰は頼むに足らず、或時は高原の上に至るべきも又た忽焉にして煙雲深き處に入るべし。頑心尙勇に野性猶ほ存す。今日人を免すの度胸を學び、明日人を嫉むの言行を敢てす。我れ實に安心せり、立命せり、一切明日の事を思ひ煩はずと高嘯す、而して其時の心にては、眞に全く然りしなり。然かも一問題の起り、一事件の生じ來るや、遽々然として狼狽し、更に迷塗に墜落す。愛を説く者にして人を陥れ、武俠を稱する者にして卑怯の振舞に出で、人を罵りて自ら罵られつゝあるを知らず、

頭を隠して其臀を隠さざるもの、世間其人に乏しからず、而して是れ皆得牛の人にあらざるが故のみ。一たび得牛の人とならんか、己が弱點は暴露せられ、己が罪惡は發見せられ、高きものは落され、強きものは挫かれ、今や顧みて己れの偽物たるを自覺し來るや、天に對し、人に對し、悔恨無極、悲痛無限の情禁ずる能はず、ア、我れ困める人なる哉と叫ぶに至らん、而して其奮闘努力の猛烈なる事は、此の圖に依りて知る事を得べし。得牛己に了れば則ち牧牛なり、人もしこくに到らんか、復た奮闘努力を要せざるなり。牛は己が意に従ふて進退し、己が命に應じて來往し、寔に愛すべきものとなるべし。然れども此の得牛を卒業して、而て彼れ牧牛の人たるもの、果して其れ幾人ぞ。

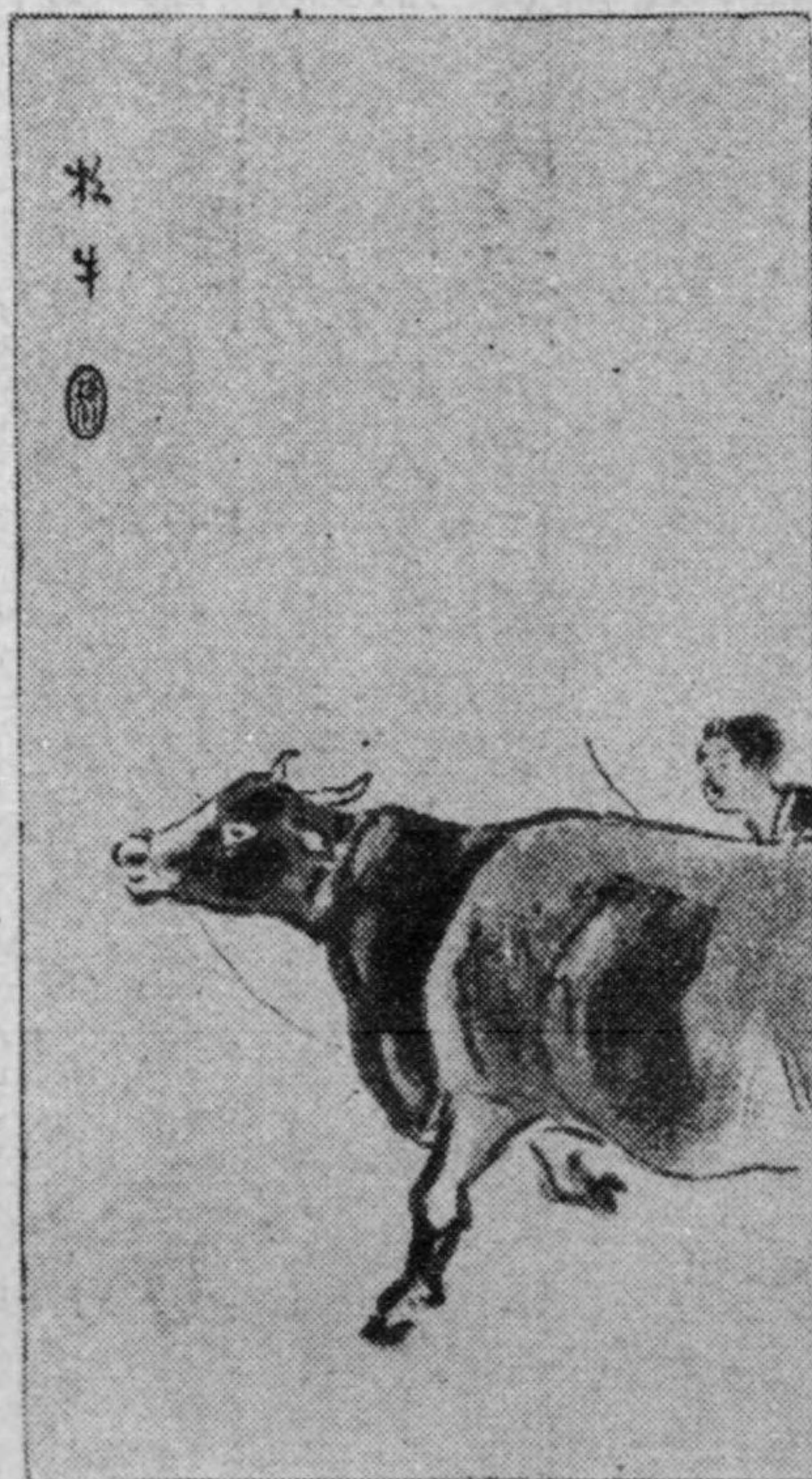
道を聴くもの多しと雖ども、果を結ぶもの極めて尠し、耶蘇は
種蒔の譬に於て之を説き、孔子は「與に共に學ぶべく、未だ與に
立つべからず」と戒しめぬ。然則求道者諸君よ、道を尋ね、道を
認め、而て道の全體を見たるときは、大死一番、どこまでも之
に合體せん事を勉め、小童の巨牛に當るが如く、努力奮闘、以
て其目的を達せざるべからず。目で見て口で説くの生意氣者と
なる勿れ、又た其繫を放て逃げ去るの弱蟲ともなる勿れ。往け、
往て、猛然此牛を捕へて之れと闘ひ、遂に此牛を牧し、此牛に
騎り、更に此牛を忘れて、道の本源に還るの至人となるべし。
何事も忍耐に在り、忍耐の後に喜悅來り、努力の後に好運開く、
宗教に於ても亦た同じく然るなり。

牧牛の圖に題す

野牛を獲得して、之を我物と爲さんと欲し、こゝくに渾身の勇氣
を振ふ。山中の賊の如きは易々たるのみ、耳口の學の如きは兒
戯に類す。吾人はどこまでも當初の目的を貫き、啻に此牛を得
るのみならず、更に之を牧し、之れに騎り、遂に之を忘れて道
の本源に還るの妙境に入らざるべからず。乃ち努力又努力、奮
闘又奮闘、頑心に抵し、野性に抗し、いよ／＼こゝくに之を馴致
し得るの一段となりぬ。
見よ、暴れて暴れて暴れ廻りし牛も、今や影の形に添ものとな
りぬ。叱すれば蹙み驅れば行き、索をとつて前に進めば、水の

Feeding the Bull.

Grasses soft and water sweet
To the captive he offers,
And the brute so wild before
Now quietly follows the boy.



日數へて野がひの牛も手なるれば
身にそふかけとなるぞ嬉しき

鞭索時時不離身 恐伊縦步入埃塵
相將牧得純和也 羈鎖無拘自逐人

窮るところ、雲の起るところ、只だ我意のまゝと是れなりぬ。
愉絶快絶實に此上あるべからず。喫すれば即ち罪を犯したりと
感じ、飲すれば即ち慾に誘はれたりと心得、こゝに死體を擁て
困憊す。是れ得牛の人たるが故のみ。若夫れ得牛を卒へて、牧
牛に入らんか、行かんと欲すれば則ち行き、止まらんと欲すれ
ば則ち止り、曾て物涯の羈絆を受くるなく、雲は自ら悠悠、水
は自ら流る。勿論、未だ容易に油斷すべくもあらず、時々鞭
索を須ずんば、恐らくは更に歩を縦にして埃塵に入らん。前思
後念今猶ほ監視の下に在らざるべからず。然れども已に野性を
打ち従へ、已に頑心を碎き去り、已に蛇頭を擊殺し了はりぬ、サ
タンの支配は唯だ其の尾端に屬するのみ。未だ眞妄を説て、二

二六
義に落つることを免れずと雖ども、已に蹉跎たる力を得たり、
塵中に在るも塵に染まず、獨り蓮花の泥中に卓出して、優然人
を驚殺し、又た笑殺するの快味、こゝに至りて始めて解る。
其れ然り然れども是れ漸く修業の半のみ、前途尙ほ五段を残す。
鼻索牢く牽て放つなく、方に克己の途に在りと知るべし。然而
して若夫れ此牧牛より騎牛に入らんか、羈鎖なく、戒律なく、祖
師なく、經典なく、只だ我が道に騎りて行んのみ、更に一段の
高處を見ん。

騎牛歸家の圖に題す

已に自覺して鞭索を擲ち、已に一躍して牛上に横はり、村歌を
唱へ、野曲を吹き、晚霞と共に家山に還る、其の情の落々たる、
其の意の蕩々たる、蓋し無孔の笛を聞き、没絃の琴に和するも
のにあらずんば、識る能はず。岷々として山嶽の如く、洋々と
して江海の如し。知音何んぞ必ずしも唇牙を鼓せんやである。
顧みて過ぎ來し方を眺むれば、得失の岐路四方に横はり、物心
の危峰隨處に聳え、今更ながら向上の困難なりしを憶はしむ。
其然り然ども今や干戈は已に罷て、只だ雲霄の高を仰ぐのみ。
呼喚するものありと雖ども、復た回すべくもあらず、撈籠する

Riding the Bull.

Though not pompously clad,
Proudly rides he on the Bull's back,
And playing upon his flute
Homeward he wends his way.



かへり見る遠山道の雪消えて

こゝろの牛に騎りてこそ行け

騎牛迤邐欲還家 羌笛聲聲送晚霞
一拍一歌無限意 知音何必鼓唇牙

ものありと雖ども住るべくもあらず。自ら主人公と尋ねて諾々と答へ、一拍一歌、悠々として自得の境に逍遙す、何んたる快感ぞ、何んたる高懷ぞ。牛は命ぜずして行き驅らずして進むも更に其道を違ふことなく。我は轡せずして騎し、鞍せずして踞するも更に墜落の恐なし。我と牛とは一體となりぬ、牛と我とは一意となりぬ、復た尋得牧の勞苦なく、雪は鷲山の彼方に消え、霞は舞雩の野を掠む。春色は天地に満ち、精氣は萬物に溢れ、柳花は我を送り、家人は我を迎へ、今やいよいよ故山に還りて、多年奮闘の褒賞を得たり。何等の光榮ぞ、何等の慶福ぞ。其れ然れども諸君は未だ容易に誇るべからず、前途尙ほ四段を残す、諸君の騎牛や可し、而かも猶ほ騎牛の煩あり、諸君

の達悟や可し、而かも猶ほ差別の觀あり。
めて、乃ち忘牛の人とならざるべからず。
りて通じ、更に別天地の風光に接せん。

三〇
更に竿頭に一步を進
山極りて開け、水窮

忘牛存人の圖に題す

家山に歸り來れば、牛は忽焉として失ぬ。而して今や牧すべき
要もなく、騎すべき煩もなく、悠々たり、閑々たり、天々たり、
申々たり。曰聖書、曰六經、曰經文、曰誰聖の語、曰某賢の言、
今や已に用なきなり。我れ今、月を仰で樂しむ、何んぞ復た指
を見ん。陸に上るものは舟を捨つべく、樓に登るものは楷を忘
るべし。蹄兔の異名を覺り、筌魚の差別を識り、こゝに始て不
朽の大道を語るべく、こゝに始めて道會の主張に和すべきなり。
金や鑛にありと雖ども其金たるを失はず、月や雲に入ると雖ど
も、其月たるに異同なし。而かも鑛を出でて始て光あり、雲を

Forgetting the Bull.

But now the Bull disappears,
A solemn stillness reigns,
The night advances fast,
And lo! the moon shines bright.



騎牛已得到家山 牛也空兮人也閑
紅日三竿猶作夢 鞭繩空頓艸臺間

よしあしとわたる人こそはかなけれ

ひとつ難波のあしとしらすや

離れて始めて明あり。牛を捕へて牛に捕へられ、祖師に就て祖
師に縛られ、或は抹香臭く、或はバタ臭く、而して心外無法、滿
目青山の妙境を味ふ能はざるものゝ如きは、與に忘牛の奥義を
談ずるに足らざるなり。
噫、忘るべし、棄つべし、何時まで人の糟魄をや舐らん。萬物
皆我れに備れり、復た何んぞ、門に沿ひ鉢を持して貧兒に倣は
ん。曰く佛法、曰く基督教、曰く何々、曰く何々と、門を分ち
派を争ふ、是れ強ち擯くべきものにあらず、道を學ぶに順序あ
り、尋見得、牧、騎、是れ皆踏むべき道程なり。然れども見
よ、已に忘牛の一段に至れば、最早や物に求めずして我に求め、
地を見ずして天を仰ぎ、萬波の歸するところ、千峰の止るとこ

ろに思ひ入り、我に對するものは、只だ天のみ、天に對するものは只だ我れのみ、而してかの孔丘たり、釋迦たり、耶蘇たるもの、畢竟皆我徒にして、彼我互に捕縛せられざる自由の身たるを知るに至らん。悠悠たる哉、天々たる哉。其れ然り、然れども之れ未だ得道の極致にあらず。前途尙ほ三段を殘す。來れ俱に來れ、登れ與に登れ、我れ諸君に其頂を示さん。

人牛俱忘の圖に題す

牛を忘れて月を仰ぎ、萬波の歸するところ、千峯の止るところに思ひ到れば、我れも亦た忽焉として失せぬ。凡情と謂ひ聖意と説き、有佛と陳べ、無佛と稱し、或は牛を捕へて奮闘し、或は牛を驅て逍遙し、或は牛を忘れて、遂に天に對するに至れりと雖ども、而かも此天に對するもの、抑々是れ何物ぞ。如何に進化せしとは云へ、尾骨尙ほ其臀に存す。如何に向上せしとは云へ、未だ臭骸を脱する能はず。左らば所詮は一切此の「我」を打忘れて、唯り此の「天」に合するにあるのみ。是れ人牛俱忘の奥義なり。見よ、人もなく、牛もなく、而して終には天

Forgetting both the Bull
and Self.

The Bull exists no more,
The moon exists no more,
The Self exists no more,
'Tis only Nothingness that is.



鞭索人牛盡屬空 碧天遼闊信難通
紅爐焰上爭容雪 到此方能合祖宗

雲もなく月もかつらも木も枯れて

はらひ果たるうはの空かな

も亦た在ることなし。百鳥の華を獻じ、三六 舍者の席を避くる時代に過ぎ去れり、而して今や月もなく、我もなく、陸もなく、樓もなく、功なく、名なく、固なく、必なく、滅するが如く、没するが如く、只だ在るものは虚空のみとなれり。此の虚空は何物ぞ。説くべからず、描くべからず、寂たり、寞たり、而かも無にあらず、百物其中に充つ。取捨なく、愛憎なく、洞然明白なる處に、雨雪潜み、風雷黙し、達摩となり、ビスマルクとなり、波濤となり、野花となる。嗟呼今の世に此堂奥に入るもの果して其れ幾人ぞ。辯舌家は之あり、思想家は之あり、批評家は之れあり、否、自ら得たりと己惚るもの亦た之れなきにしもあらざるなり、而かも眞に尋牛より、騎牛に至り、騎牛より、

更に此人牛俱忘の神域に入り、慶賞爵祿を忘れ、非譽巧拙を忘れ、遂には四枝五體をも忘れ、天を以て天に合し、よく不思議の處に不測の情識を煥發し來るもの果して其れ何人ぞ。請ふ先づ大鐵鎚を振つて、汝の心胸を擊碎し、汝の野望を撲滅し、汝の裏に大虚空を開き來れ、然らば聖靈は汝に降らん。汝の書を焼き、汝の舌を抜き、汝の眼を閉ぢ、汝の耳を塞ぎ、而して全く汝の存在をも忘れ去るべし、然らば百川盡く汝に向て宗朝し來らん。尤も是れでもまだ得道の極致にあらず、猶ほ返本入塵の二段を残す、而かも先づ此大掃除、大廓清より大虚空の處に達せずんば、畢に其人たること能はざるなり。

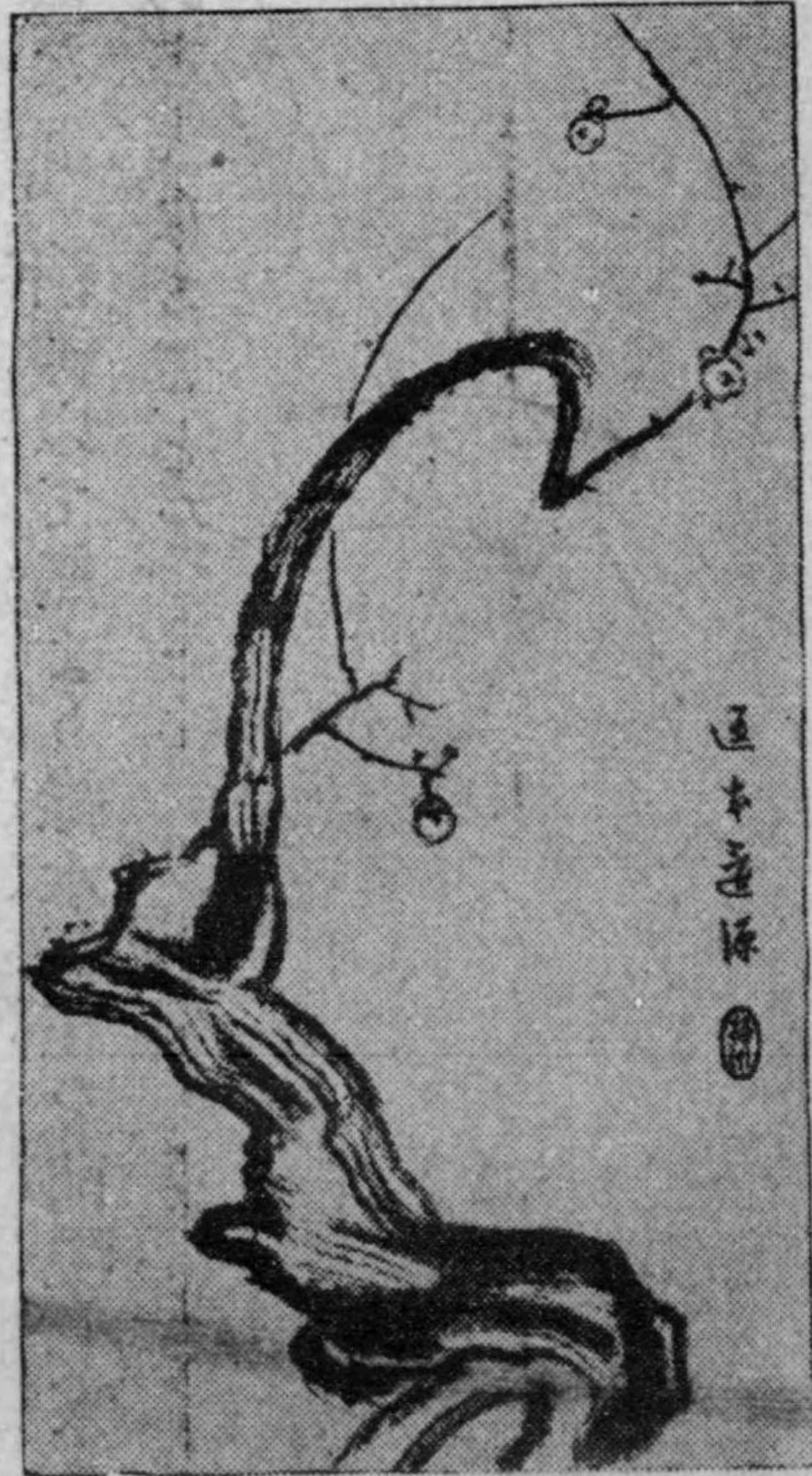
百鳥銜花、而與誰居、一塵翳天、一芥覆地、月宿清潭、風生空堂。

返本還源の圖に題す

牛もなく人もなく、巧もなく智もなく、神もなく、聖もなく。過去一切の努力工夫、今や全く消滅し去れり、然れども天下一物も眞消眞滅すべきはあらず。こゝに於てか梅花水流となりて現はれ來れり。消極の終るところは、即ち積極の始まるところなり。金鳥の海に没するゆるんは、乃ち曉天に新光を放つゆゑんと知るべし。見よ天地晴朗、春風脈々、花開き、水流れ、鳥歌ひ、人笑ふ、是れ即ち神境にあらずや、佛涯にあらずや。人もしこゝに至らんか、八方無敵なり、隨處不孤なり。頑童も、痴爺も、醜男も、美女も、高德も、極漢も、野夫も、大賢も、

Back to the Origin.

He now is wide awake,
His mind broadens,
All things please him,
Spring with its birds and flowers
has come.



返本還源已費功 爭加直下若盲聾
庵中不見庵前物 水自茫茫花自紅

法のみちあとなきもとの山なれば

松はみどりに花はしらつゆ

但しは十字架上の殺人犯者も、仰ぎて動き伏して化し、皆バラ
ダイスに登ることを得ん。
夫れ此道や極めて平々坦々たり。迷もなく、悟もなく、波もな
く、色もなく、本来一の清淨身のみ何んぞ亦修治を假らんや。
榮枯を觀じ、凝寂に處し、雲を起し、水を湛ゆと雖ども、只だ
それ岫を出づるのみ、只それ科に盈るのみ。咲くも美なり、散
ずるや亦た美なり、青も可く、紅も亦た可し、山は高く水は長
く、只だ見る一道の生命、其間に往來して、眞善美愛の發現、殆
んど我眼を眩ぜしむるものあらんとす。啻に千波萬波に即して
一體の水を知り、千差萬別の色に即して一様の空を悟るのみな
らず、須らく其水に舟を浮べ、其空に飛航機を馳せ、以て惺々

の業に入るべきなり。

然らば則悟したるや否や。去情以て名利を脱却し去る、是れ人牛俱忘の極意なり。清神以て無より綠水紅花を前現し來る、是れ返本還源の奥義なることを。

入塵垂手の圖に題す

忘牛は忘我となり、忘我は太虚となり、太虚の中に意動き、意動て梅流となり、衆生こゝに集り、麋鹿こゝに飲み、こゝにパラダイスを現出し來る、是れ前段に説くところなり。而かも此花たり此水たる、未だ自然宗教の藩圍を脱する能はず、呼べども應へず、語れども言はず、春夏は秋冬と變じ、歡喜は悲哀に易り、復た慰むるところあるを見ず。於此乎、宇宙の心は、帝となり、神となり、佛となり、父となり、布袋となり、聖人となりて、いよ／＼こゝに入塵の幕を開き來る。

宗教の極意は、畢竟それ那邊に在る。曰く神佛の心を體するに

n the World.
 The Eternal way,
 Personified by the Wise —
 The Heart that loves —
 Reveals itself to Man..



手はたれて足はそらなるおとこ山
 かれたる枝にとりやすむらん

露胸跣足入塵來 抹土塗灰笑滿顛
 不用神仙真秘訣 直教枯木放花開

在るのみ。神佛の心とは何、曰く慈悲なり、愛なり、仁なり、義
 なり。受けずんば授くる能はず、得ずんば與ふる能はず。是故
 に尋牛より、得牛に至り、得牛より俱忘に至り、俱忘より還源
 に至り、かくて努力奮闘、自卑登高の修業を積むものなりと雖
 ども、若夫れ入塵垂手の功德を施すものたる能はずんば、畢竟自
 覺一片の羅漢にて終らんのみ。さらば自己の風光を埋め、前賢の
 途轍に負き、菩提樹の下を出で、ナザレの村を去り、飢ゑたるも
 のに食はせ、渴けるものに飲ませ、壓へらるるものを放ち、繫
 がるるものを解き、病者を其床に見舞ひ、冤者を其獄に尋ね、而
 して貧者に福音を傳へよ。念ずるところは衆生の濟度のみ、願
 ふところは救世の大業のみ、是れ還家入塵の目的にして、而して

神佛の吾人に命ずるところの特權なり。否、已に洞然として太虚に入り、四肢を離れ、五體を去り、而して斯の眞と靈との家に還り來らば、我即神佛、神佛即我なり、何んぞ復た命を稱し、權を説んや。天上若し神なしとせば、我れ乃ち神たらん、天下若し佛なしとせば我れ乃ち佛たらん。我れは他より驅られて動くものにあらず、我れは物に役せられて行くものにあらず、我れは淨土に住せんよりは、寧ろ此人界に居らんことを冀ふ、我れは我弟子をして此世を去らしめず、寧ろ此世に在て光鹽たらしめんことを冀ふ。瓢を提げて市に來るゆるんものは、即ち酒肆魚行をして化して成佛せしめんが爲めなり、胷を露はし足を跣にして塵に入り來るゆるんものは、即ち枯木をして花を

放て開かしめんが爲めなり。十字架の甘きことや蜜の如く、毒杯の芳しきことや花の如し。其席は暖まるに暇なく、其突は黔むるに由なく、轍天下を廻りて、終に途に老す。是れ皆聖者の跡にして、而して神佛其者の心なり。此心を養ふて其蹤に従ふ、之を入塵垂手の人と謂ふなり。

若夫れ事を此に失せんか、たとひ百鳥華を啣み、舍者席を避くるとも、亦一場の滑稽のみ。たとひ諸々の奥義に達するとも、たとひ山を動かす信仰あるとも、たとひ如何に善く説き、如何に巧みに辯ずるとも、鳴る鐘や響く鉞の如きのみ。たとひ拈華微笑の大悟を得たりと稱するとも、もしも其人にして茶店の烟と魚店の水に混ざること知らず、寶蓮を火中に開かしむる能は

四八
ずんば、彼れや畢竟無用の長物のみ。世の宗教を論ずるもの、何んぞ其舌を閉ぢ、其筆を投じて、此處の實行に向はざる。國政亂れて民塗炭に苦み、世道崩れて人地獄に落つ。十牛最後の極意は、畢竟、此世と此人とを救ふに在るぞ。

十牛一括

さて十牛を講じて、いよく終結となつた。然し前文は餘りに漢文體なるが上に、故事を交へて、チョット解し難い處があるから。序の事に、一ツ平易に總括をやつて見たいと思つて、こゝに之を入るとしした

尋牛(一)

尋牛の意義は如此である。つまり縁なき衆生は度し難いから、先づ道を求むる心になるのが第一である。道を求むる心の無いものは、視ても見えず、聴いても聞えず、食ふても其味を知らざる類であるから、釋迦が出て説かうが、基督が現れて教へやうが六藏しい。所詮は病氣になつて人生を果敢むとか、事業に失敗して人の智慧や工夫の頼むに足らぬことを覺るとか、親とか、子とか、妻とか、友とかど、俄か

五〇
に死して、今更の如くに浮世の無常を感じるとか、但しは膽力の足らぬことを嘆て居るとか、いつも心配の種が絶えずして煩悶して居るとか云ふ境遇に陥ると、我と我から進んで道を求むる氣になる、其れが即ち尋牛である。處で其尋牛がまた却々容易の業でないので、行てもく其牛は見えず、只だ空蟬の聲のみ聞えて、狐疑や、蠱惑や、理窟や、妄念や、惡習が心の眼を掩ふから、是非鋒の如くに起るで、急には其道が見つからないのである。

見跡(二)

或時は耶蘇教の會堂へも行て見る、或る時は鎌倉の圓覺寺邊までへも、隻手の聲を聞きに行く、又た或時は傳習録を借りて來たり、菜根譚を讀んで見たり、又は名牧師や高僧に會て見る、然しまだなか／＼豁然貫通と云ふ處には行かない。エーま

まよ馬鹿々々しい、一體どこに居るやら、サツバリ見當のないものを何時までかうして探して居たとて、到底端のないことであるから、寧ろ廢めて仕舞へと、自暴自棄になることも度々ある。然し自暴自棄したところで、矢張り煩悶が無くなつたのではないから、又々勇を鼓して尋ね廻つて居る。スルト今度は不斗した出來事より、又は不斗した心的状態より、但しは様々工夫の揚句、不斗足下に氣がついて見ると、豈圖らんや、己のが尋ぬる牛の足跡は歴々として其前に横はり、さては此處だと見當がついた。即ち衆器一金と悟つたから、欣喜雀躍、手の舞ひ足の踏むところを知らず、最早やメ太ものなりと、此れより一直路に進むところである。

見牛(三)

さて衆器一金の悟は開けた、然し其はまだ知識の眼ばかりであつて、ナカ／＼己

れが其本體を見るところまでには到らない、況んや之を我が手に繋ぎ得るといふところまでには行ては居らぬ。然し已に見當がついたのであるから、最早や右往左往せず、其足跡を傳ふて進んで居ると、今度はいよく其體を見たが、併しまだ全體ではない、其尾ばかり、其影ばかりである。

さて諸君よ天道や人道は、決して一躍に求め得べきものではない、乃ち横井小楠も曰はれた、「斯道一躍求むべからず、助けず長ぜず、自ら悠々」と、物は皆順序のあるもので、高に登るには卑きよりせざるべからず、大學は小學より進まざるべからず、藝術を學ぶに於ても、亦同じく然りである。ひとり天人の二道を學ぶに於て、豈其れ然らざるの理あらんやぢや。勿論頓悟と云ふこともある、一旦豁然として貫通すと云ふこともある。然し其頓悟も、貫通も、皆多年の努力より贏ち獲たる結果であると云ふことを忘れてはならぬ。

左れば諸君は、直に大智識や大得道家になれぬからとて、失望してはならぬ、否、直に山の頂上に登れなくともよろしい、其の登りつよある途中が、またナカ／＼面白いのである。どちらへ往つてよいやら分らない中こそ不愉快であれ、已に其方向さへ分れば、其の後は悠々と其場々々の景色を眺めつよ、愉快に面白く上へ上へと登りゆくのである。

得牛(四)

道は分つた、其の何物たるかも知れた、そして段々と學得の坂路を登つて行くことは、實に無上の愉快である。然し此山には峠がある、斷岸絶壁の難處がある、ソナに悠々とばかりやつては居られないところがある、乃ち此得牛の一段の如きは其處である。

今までは其跡を見た、而して豫め其の何物たるかを知つたばかりであつて、まだ之を我手で捕へたのではなかつた、即ち之を體得したと云ふのではなかつた。知つたばかりでは初歩で、見たばかりでは未だ離れて居る、必ず之を我物となし、之を日常行爲の上に現はさねばならぬのであるが、其れがナカ／＼六ヶ敷のである。隨處に主となれば立處皆眞と聞いて分つて居る、然し實際に至ると、物事に驅られて、始終其奴隷となつて居る。神を信するものは、憂へず懼れずと教へて居る、然し其先生が直に憂へ直に懼れ、實際に臨んで醜態を極めて居る。即ち其知つて居り、其説て居る事が、未だ其人の物にはなつて居ない。ソレでは知道の人と云へるが得道の人とは云へない。ソコで一ツ此得牛の峠を越さねばならぬのであるが、其れが大勇猛心と大奮闘とを要するのである、頭で知て居るばかりでなく、目で見て居るばかりでなく、いよく之を捕へて見ると、頑心尙勇に野性猶ほ存すとあるから、暴れる

は、暴れるは、蹄で蹴る、角で突く、巨力を將て我を引摺り行き、ナカ／＼容易に御し得られるものではない。孔子は此消息を洩して、義を聞て移る能はず、不善改むる能はず、是れ我憂なりと云はれた。又た保羅はア、我れ困める人なるかな、我れ善を爲さんとするに我が肉に居る罪之を爲さしめずと白狀した。されば手綱を牢く牽て放つなく、我が意馬心猿の曲物に鞭撻を加へて、漸々に之を鎮め馴し、遂に之を我家畜となさねばならぬ、即ち遂に知つて居る見て居る其の道を我物と爲し、之を行住坐臥の間に前現せしむる人とならねばならぬのである。

牧牛(五)

勿論修養は一代の業であるから、道を得て仕舞つたから、直に心の欲するところに従へども矩を躐えずと云ふ譯には行かぬ。然し此得道の一段を終ると、道を行ふ

ことが非常に樂になる、即ち牧牛となる。鞭索を執て前に行けば、柔しく随ふて來る、身に添ふ影となるぞ嬉しきで、可愛くなる、親しくなる。勿論まだ鞭索をゆるめてはならぬ、ウツカリ安心して居ると、不意に「歩を縦にして塵埃に入る」とあるから、動もすると名に驅られたり、利に釣られて、大失敗を來さぬとも限らない。彼の人にして此事あるかと思はしむることのあるのは、道を得たつもりで、其心を緩めて居るから、不意に悪魔の襲撃に會ふて、大醜態を顯はすことになるのであるから、まだく決してく油断してはならぬ。

騎牛(六)

サアここまで來ると更に一段の自由を見る。最早や驅るべき鞭も要す、牽くべき綱も無用となり、我れ自ら其牛に騎て仕舞つたのである、否、最早や尋ぬべきもの

もなく、見るべきものもなく、得るべきものもなく、牧すべきものもなく、我れと彼れとは已に一物となつて仕舞つたのである、乃ち身を牛上に横へ、目に雲霄を視、優然として野曲を吹き、陶然として煙霧を出で、歩々清風に送られつゝ得々として家山に還り、始めて我が初一念の志を達したのである。

忘牛存人(七)

此れより道徳を離れて宗教に入るのである。

さて牛に騎て家に還つて見ると、其牛は忽焉として消せて仕舞つた。因てハテ不思議な事よと、之を尋ねて庭園に出づれば、萬籟寂として聲なく、獨り明月の中天に懸るのみである。

ソコで仰て天を眺め俯して地を見、つらく萬物の由て來るところを尋ねれば、

問題は最早や牛にもあらず、我にもあらず、而て此天の一に在ることが分つたのである。即ち「道の本源は天に出でて易ふべからず、其實體己に備つて離るべからず」と云ふ意味が分つたのである。さらば天とは何んぞやと云ふに、天とは専ら之を言ふときは道なり、形體を以て之を言ふときは天なり、主宰を以て之を言ふときは帝なり、妙用を以て之を言ふときは神なりとあるから、此の天と此帝と、此神とを知らるゝのが、即ち忘牛對天の奥義である。

人牛俱忘（八）

牛ばかりではない、終に我をも忘れねばならぬ。牛とか、我とか、天とか、人とかと區別する様ではまだ不可ぬ。天即我、我即天とならねばならぬのである。然し其れに至るには、先づ私心を去らねばならぬ、而して更に太虚の虚に同ぜねば

ならぬ。若夫れ太虚の虚に同ぜんか、聖靈充ち、洪氣溢れ、神智靈覺直に其間より湧き出づるものとなるのである。即ち太虚は圓空なりと雖ども、やがて物來鬼入の神境となり、直に梅流ともなり、聖人ともなりて現はれるのである。

返本還源（九）

此れまでは自己一身に關する修業であつた、即ち小乘的の説示であつた。然しこれよりは大乘に入て、人の爲め、社會の爲め、國家の爲めに活動すべきを教ゆるのである。孔子教で云ふならば、勿意勿必勿固勿我の處、老子教で云ふならば、無己無名無功の處が、即ち人牛俱忘に當るのであるが、其ればかりでは消極で駄目であるから、體て徳化の業に従ひ、其内に入り來れる靈氣の作用として現はれたるものは水と梅である。ソコデ水は自ら茫々、花は自ら紅なりぢや。誇るところもなく

六〇
媚ぶるところもなく、眞に無我無心である、然し其流容と其花姿とが、何んとも云へぬ清き感化を人に與へる。小供も、大人も、美女も、醜男も、愚者も、賢者も、皆ひとしく此水を汲み、此花を眺めて、其徳に與る、而て此處が即ち宗教である。神は其處に笑面を現はして御座る、佛は其處に合掌して居る。乃ち道を求め、道を得、道を行ふべき吾人は、遂に此處の神境佛涯に達せねばならぬのである。

入塵垂手（十）

水花の徳も偉いものぢやが、まだ足らぬ處がある。即ちまだやつと消極的無心の境を出たばかりであるから、親味の通らぬ處がある。水に向ふて呼ぶも、水は更に止らず、花に向ふて語るも、花は更に答ふるなし。どこかに冷かな温くない處がある、どこかに接觸しない處がある。ソコで最後には肉あり、血あり、情あり、意

ある我等同胞の布袋ともなり、聖人ともなりて現はれ、山を出で、寺を離れ、讀經を廢め、神學を擲ち、直に人衆の雜沓して居る塵前に入り來るのである、而して其の現はるとや、我れ呼ばざるに彼れ來り、我れ言はざるに彼れ語り、其の心の清きこと水の如く、其の香しきこと花の如くなるが上に、飢ゑるものに食はせ、渴るものに飲せ、壓へらるるものを放ち、苦しむものを勞り、貧しきものに福音を聞かせ、而して此世の地獄を化して、極樂淨土たらしめんと圖り、遂に其身を殺して悔ひざるに至る。之れが十牛最後の説示であつて、又た宗教道德の絶頂である。

さて前にも申通り、物には順序がありて、一躍には至ることが出来ぬ、其故に尋牛、見跡、見牛、得牛、牧牛、騎牛、忘牛、俱忘より遂に返本を経て、此の入塵に達し、而して自ら神佛の名代若くは神佛其物となるのが、即ち諸宗教の極致であるから、道に志すものは、よく其順序と到著點とを識別せねばならぬ。

六二
ソコで之を我道會の四綱領より云ふときには、忘牛までが修徳で、人牛俱忘が信神で、返本入塵が愛隣で、而して此れが皆永生の道程に在るのである。

結 論

左れば十牛の圖は、畢竟何を教ゆるか。曰く滔々たる世上、多くは皆動物的生活を送つて居る醉生夢死の人で、嬉しければ笑ひ、悲しければ泣き、或は浮かれ、或は沈み、波濤のまにまにゆられゆられて世を渡り居るが、如其事では不可ぬ。どうか如何なる境遇に處しても、意義ある徹底したる動かぬ感はない生涯を送りたいものと考え、ソコで其道を尋ね廻り、初めには足跡ばかりを見、次で半身を見、其れより之を得、之れを牧し、之れに騎り、ソコでいよく我家に歸て見ると、其牛が消て仕舞

ひ、其牛が消て仕舞ふと同時に、其の牛の出で來れる天を教へられ、アア道の本源は此處ぞ、難有し恭けなしと、只管之を拜して居ると、此度は我身が無くなりて、其儘梅花ともなり清流ともなり、更に又た布袋ともなり志士仁人ともなりて、天の命を此の世に行ふものとなる。是れが道德宗教の極致で、彼れ尋牛より此れ入塵までが、即ち吾人の道に志ざすものゝ登り行く道程であると云ふことを教ゆるのである。解りましたか。動物が人となり、人が神となるのであるぞ。

大正五年五月十五日印刷

十牛圖解與付

定價金貳拾錢

大正五年五月十八日發行

著者

松村介石

發行者

石川進

東京市外中澁谷七四三番地

印刷人

飯島省一

東京市本所區番場町四番地

不許複製

發行所

東京市外中澁谷七四三

道

會本部

(振替東京二五九二六番 電話芝一七六七番)

大賣捌所

東京市京橋區尾張町

警

醒社

(振替東京五五番)

毎月一回発行

道

一部十五錢
半年八十錢
一年一圓半錢
郵税不要

松村介石主幹

『道』は道會の主張を鼓吹するものにして大正五年五月に至りて、正に九十七號に達す、即ち滿八ヶ年以前に現出したるものとす。

當今宗教頹廢し精神界混亂し世人その去就に惑ふとき、茲に宗教の權威を打立て、精神界の治平を圖らんとするもの、即ち我『道』の使命なりと確信す。毎號松洲畫伯の畫あり、之れに對する松村先生の題文あり、其他松村先生の宗教并に精神修養に於ける熱烈なる文、同じく諸大家の宗教及び精神修養に關する高論卓説を掲載す。精神修養の好侶伴たるを失はず。

東瀛 京市 外中 道會事務所 振替 東京 芝 二五九二六 電話 一七六一七

毎月一回発行

道話

一部金七錢
六部金卅九錢
三部七十二錢
郵税不要

松村介石主幹

『道話』は當世に於ける心學道話なり。

道の會に於ける諸名士の講演筆記あり、修養談あり、爲めになる面白き話あり、親之れを讀めば子を教へる道を知り、子之れを讀めば親に事ふる道を知り、夫之れを讀めば妻に對する道を知り、妻之れを讀めば夫を扶くるの道を知る、其他簡易明白にして面白く天道と人道とを説くもの、當今『道話』の外多く之れあるを見ず。

東瀛 京市 外中 道會事務所 振替 東京 芝 二五九二六 電話 一七六一七

『道會』の主張

吾黨は一教一派に屬するものにあらず、不朽の道、不易の真理、即ち古今に互り、萬國を通じて、動かす變ぜざる宗教倫理の根本義に據り、人をして天に對し、人に對し、永遠に對して、自己一身の安立と、責任とを完ふせしめんとす。而して其會員たるもの心得左の如し。

綱領

道の會員は左の四綱領を奉すべき者とす。
一、信神
一、修徳
一、愛隣
一、永生
信神とは、宇宙の神を信するを謂ふ。永生とは、自己一身の修養を謂ふ。愛隣とは、人と國家の爲に盡すを謂ふ。永生とは、人格の不死を謂ふ。

本會と會員

本會は、右の綱領を奉じ、之を行爲に施すもの團體なり。會員は神を父となし、人類を同胞となし、相互を兄弟姉妹となすの覺悟あるべきものとす。

儀式

入會式、婚禮、葬儀、禮拜式等、凡そ一切の

儀式は、國と時代の便宜によりて之を定む。

事業

傳道の外、愛隣の主張を有するものなれば、社會事業にも、國家事業にも、一個人若くは團體として、挺身努力することを怠るべからず。

經典

天啓を受けたる神人の教に據りて編纂するものとす。

道と雜信

信神、修徳、愛隣、永生、是れ不朽の道にして、不磨の眞理なり。是故に、此の道に信する者は、何人たりとも、此の道たる眞理を奉ずる者たらんは、此の如何なる綱領を奉じ、神人交通の靈的經驗、即ち心證あるも、道會員の資格を有するものとす。

道會

事務所 東京市外中澁谷七四三番地
電話 芝一七六七番
振替口座東京二五九二六番

『道の會』の趣意

斯の様に風俗が紊れ、人情が浮薄になつて來ましては、何によりも先きに、先づ人々に己が身を修むることの大切なることを教へねばなりません。而して此の己を修めることに氣の付いたものが寄り合つて一つの團體を拵へ、以て人の爲め、國家の爲めに働かなくては、此の日本國をして眞の發達を遂げしむることが出来ませぬ。

『道の會』は古の如き趣意で、起つたものであります。賛成の方は集會の折り、係りの者にか又は直接に事務所へ申込んで下さい。

會規

▲目的 會員をして、第一に己れの身を修め、第二に己れの職業に勉強して、且つ國家の爲め人の爲めに盡さしむるにありませぬ。

▲事業 本會の事業は目下の所

一、東京市内各區及地方に於て講演會を開く事

一、雜誌「道話」を發行する事の二つなれど追々に増加します。

▲會員 右の目的に賛成し、且つ會の事業を翼くるものでなくてはなりません。

▲役員 本部に幹事若干名を置き、各區「道の會」支部の幹事と協議し、本會の統一を計り其の事務に當らしめます。

▲賛助員 本會の趣意を賛助して、或は講演の依頼に應じ、或は金品を寄附せらるる人々を賛助員とします。

▲會員 支部所在の會員は、毎月支部所定の會費を納むべきものとす。支部なき地方に於ては「道話」を購讀せらるべきものとす。但し支部所屬の會員へは、其支部より雜誌「道話」を無代價にて配布します。

東京市外中澁谷七四三

「道會」事務所

電話 芝一七六七番
振替口座東京二五九二六番

松村介石先生著書

- 不朽の道 定價金五十五錢 郵税八錢
- 道と宗 教 定價金十八錢 郵税四錢
- 天 道 定價金十五錢 郵税四錢
- 人 道 定價金十二錢 郵税貳錢
- 立志の礎 定價金二十五錢 郵税四錢
- 修養 錄 定價金四十錢 郵税六錢
- 修養 談 定價金二十五錢 郵税四錢
- 學生の前途 定價金六錢 郵税貳錢
- 學生の錦囊 定價金六錢 郵税貳錢
- 萬國興亡史 定價金一圓五十錢 郵税三錢
- 歐洲近世史 定價金二圓五十錢 郵税六錢
- 萬國最近史(上) 定價金一圓三十錢 郵税三錢
- 萬國最近史(中) 定價金一圓三十錢 郵税三錢
- 萬國最近史(下) 定價金一圓半錢 郵税三錢
- 保羅の傳 定價金五十錢 郵税八錢
- リンコルン 定價金二十五錢 郵税四錢
- ナポレオン 定價金三十錢 郵税四錢
- 社會改良家列傳 定價金三十錢 郵税四錢
- 人物短評 定價金三十錢 郵税四錢
- 婦人の心得 定價金三十錢 郵税四錢
- 婦人かゝみ 定價金三十錢 郵税四錢
- 人物論 定價金十錢 郵税貳錢
- 事感小集 定價金二十五錢 郵税四錢
- 天地 人 定價金五十五錢 郵税八錢
- 老莊畫談 定價金二圓三十錢 郵税六錢

取次所

東京市外中區谷七四三
振替東京 二五九二六

道會事務所

37
496

終

